

■■ 山の生活 ■■

一 神原村本山

私などの貧しい経験から言っても、天竜川の奥の山地の、そっちこっちの峪の陰や沢の奥、あるいは目も遙かな山の中腹などに、ぽっちり一軒ぐらい構えた屋敷を見ると、どうした約束から、こんな寂しい生活が選ばれたかを思う。柳田国男先生の著『山の人生』は、山と人間生活との交渉を、各種の豊富なる資料に拠って、新たな問題と解釈を提起されたもので、われわれ祖先と山との因縁が、遙かに遠く古いものであることを考えさせる。山の生活が、漫然と平地を食いつめた者のみが、生存の一手段として択んだとする如き説明は、理由なく革めねばならない。そうして一方には、山村の生活を、あらゆる方面から、もう一度仔細に観察して、そこに織り込まれた生活のあり方等も、もう一度深く考えて見る必要があるように思う。

昭和五年五月に、少し新緑には遅い憾みはあったが、信州の神原村（下伊那郡）地内の、

もとやま

本山に幾日かを送った。飯田から南へ一二里、三河との国境に近い旦開村新野〔現、阿南町〕からは、二里半ばかり東に入り込んだ地点で、ちょうど約三〇〇町歩に亘る原始林の伐採とその路地へ植林作業中であつた。ここから最も近い部落は、役場の所在地である

むかがと

おおこうち

さかんべ

向方で、これに大河内、坂部の二部落を東西に控えて、北は地蔵峠につづき、村の中央部を占めている。この地域一帯が山深いことは、更めて説明するまでもない。越前大野郡

きたたに

北谷〔現、福井県〕の炭焼の一団が、もう数年に亘って、炭焼に従事していた一方に、山毛櫨、樅、梶の類だけは、別に製材所を設けて、各種の材料に挽いていた。

二 山の生活を見て

本山の伐採は、かなり興味のある順序によって行われている。

すなわち土地と樹木はそれぞれ別個の所有権に属していて、樹木また樹種によって所有権が分かれている。これはこの所有権が樹木売却の関係からかく複雑になったので、前言うように、山毛櫨、樅、梶等は製材を目的とする者が買い取って伐採しており、その他の雑木は炭焼の一団の手に属している。そうして伐採の後を土地の購入者が植林を行っている。こうして製材と木炭製造と植林が、各別個の資本によって続けられていたのである。

きんま

製材所に材木を運搬するには、一にそりという木馬によって行われるが、木馬挽き一人の積載量は四五〇貫ないし六〇〇貫で、これを積んだ木馬が、油を引いた横木の上を這る時は、横木との摩擦から、あたかも自動車のガソリンのように油が煙を吐いてゆく。ほと

んど全裸体の人々が迂ってゆく木馬の舵を取って走る光景は、見ていて悲壮な感さえ起る。その人々の中には、まだ一三か一四くらいの少年の姿も幾人か混ざっていた。

谷から谷へは、それぞれ道路が展開されているがこの建設はことに興味が深かったと、案内の原さんの話であった。天然の巨岩等の破碎作業にも、鉄器はほとんど使用せず、焚火と水の力です。これと思う岩石にぶつかり、傍で何時間となく焚火をする。そうして岩が充分熱した頃合を見て一時に水を灌ぐ、あるいはたんに焚火だけで破壊される場合もある。一方家の構造にも、自然の利用が実に巧みに発揮されている。こうした原始性の多い生活が行われていたのも、あながちこの一団が文化に没交渉なわけからではない、作業が比較的小規模の関係もあって、文明の利器は、経済上利用出来ぬので、山特有の技術と方法によるほかなかった。

これは最近の話であるが、製材所に発動機を据え付ける計画をたて、機械類を東海道方面から移入したが、信三の国境からは道路が不完全のために、馬の背を利用する以外に途はない。しかも器械は出来るだけ細かく分解したが、それでもあるものは六〇貫に余った。これを馬背に置くことは到底不可能であるが、そうやって新しく道路を開拓することは経済的にゆるされない。そんなことからこの器械の据附けは不可能かと、一時は諦めたほどであったと言うが、幸い前言う炭焼の一団中に、一人で一〇〇貫の薪を負う者がいた。その男は百貫藤兵衛と渾名が通っている。これと今一人の強力者とで、二人交互に二里半の険路を、ともかくも背負上げに成功したという。

三 山小屋の夜

こんな話を聴いていると、山小屋の夜はいつも更けるのを忘れさせる。外では仏法僧が遠く近く鳴いている。山の人たちはゴキトン鳥とも言うが、炭焼の女たちはからすと言っていた。そのように聞き方によっては鳴声が似ている。慈悲心鳥も時折鳴く、これはジュウイチリン（一一里）と鳴くともっぱら言われている。鳥と言え、昼間は郭公や駒鳥も盛んに鳴く。駒鳥は別に牛追鳥とも呼んでいて、シーホイシーホイと鳴くそうである。植林の人夫の一人に、蒼鳩の鳴音を真似るに巧妙なのがいた。一人でせつせと働いている時など、頭の上でその声を聞かされると、承知していながら揶揄されたような気のする一方に、淋しくもなるという。そうかと思うと、時には飛び立つほど駭かされることもある。

ハーオハオハオハハハア

以前は三河の佐太という村から、信州の坂部へ越す大峠の頂上に憩んでいてその声を聞き真に淋しかったものである。天狗が笑ったなどという話の中には、あるいはこの蒼鳩の声も紛れ込んでいたかも知れない。それほど、脱俗的な声であった。

また一人の男は、山中で日の暮方に、子持猿に遇った経験を、実感そのままに、いささかの誇張も交えず語って聴かせた。そうかと思うと、山焼きの際に、一匹の蝦蟇が焼け出されたと見え、その腐乱した半身に、蒼蠅の密集を載せて、草叢にうごめいているのを見て来た話も出る。実際なればこそ、想像では到底能わぬことで、一步山中の生活に踏み込めば、こうした物語もまた現実であった。

古い木地屋の墓が、新しく柵を作られて木地大明神の標柱が建ち、^{ほうきぎ} 箒木、ヒドオシ等の、特殊な樹相を具えた木が、新しく畏怖を喚起して、杣たちから敬遠され、ほとんど地肌を露わした峰に、伐り残されて孤立している。箒木というのは一つの根株から、同じような^{そうせい} 幹が簇生して箒の如く繁ったもの、ヒドオシは幹が中途から二股になって、東に向かってものをいう。私にことに興味の深かった話は、伐木の際挟まれて、指を打ち砕かれた青年が、突嗟に炭焼の女房から、有合せの縫針と糸を乞い受けて、真白く骨の露出した指を、片手をもって、骨の両側から、肉を一針ずつ縫い合せた。そうして何やらの草と茸の汁を有合せの手拭いで繃帯して、そのまま仕事を続けたというから大したものである。